

おわりに：執筆者諸君へ

思えば、皆さんが社会安全学部に入學して、まもなく一年が経過しようとするそのときにあの大地震が発生したのです。あのときは、日本国民のすべてが、自分に何ができるのか、何をすべきか、真剣に考えていました。とりわけ、社会安全学部在籍の皆さんにとっては、それらはより切実な問いかけであったように感じています。

残念ながら、私たち一人一人にできることは僅かでした。そのことに対する無力感にも悩まされたかもしれません。正直に告白すれば、私もその一人です。

あの震災から二年が経過し、多くの文献を読みこなしながら、このサーベイ論文を書き上げてくれたことを大変にうれしく思います。論文の質も、私が当初期待した以上に高いものに仕上がったと思っています。本当にお疲れ様でした。

気仙沼での現地調査では、皆さんが自分たちで訪問先を探し、アポを取り、現地の方々の活動を邪魔しないようにと気を遣いながら、一生懸命に学ぼうとした姿勢がとても印象的でした。その真摯な気持ちは、きっと被災地の方々に伝わったと思います。なによりもこうした経験を通じて、皆さんがより大きな人材となってこれからの社会を築いていくことが、調査に協力してくれた皆さんの期待に応えることだと思います。それは、大学で学ぶ皆さんに社会が期待していることでもあります。

皆さんの大学生活はもう一年残っています。現在は就職活動まっただ中で、気持ちが折れそうになることもあるでしょうが、この経験を糧の一つとして、悔いの無いようがんばってください。そして、卒論の完成に向けてともにがんばりましょう。

平成 25 年 3 月 15 日 残雪が眩しいいわて花巻空港にて

永松伸吾